

観相学を使った

「顔の取り扱い説明書」

嶋田 玲子

この本は三十・四十年代女性に贈る 顔の指南書です

女性は年齢で求める姿が違います。二十代は「なりたい」が多く、五十代は「なりたくない」が多い。間の世代は「なりたい、なりたくない」という二つの思いでサンドイッチになり、心の揺れで「不安恐れ」が多い。

先日「あの人の顔みたいになる・頑張る方法のメイクの本が多い。そんなの元々顔が違うし」と言っていた四十歳の女性がいました。確かにそうですね。真似した顔は平均的な美人の顔です。

平均的な美人の顔になるように頑張っても、そのことで運気が上がるわけではありません。

この話に、貴女は共感しますか。では「いくつになっても、自分がのびのび表現できる顔であつてもいいはず」など、他の発想を持ったことが、貴女にありますか。

それぞれが持つ個性は魅力です。みんな輝きたいから化粧をします。そして顔は相手にも自分にも影響を与えるので、手当てをします。あの人みたいな顔でないとダメではなく、顔を知って自分に活かすための方法を知ればいいのです。

私が「観相学」に出会ったのは「なりたい・やりたい」が多かった二十代のときでした。人相や観相は「怪しい」「科学的ではない」といわれることが多く、今も昔もそれは変わりません。

しかし「知る」という好奇心は、のちの私の生き方を広げてくれる情報となりました。

観相学とは顔の指南書であり、顔の取り扱い説明書のことです。顔の取り扱い説明書とは、人の取り扱い説明書でもあります。顔に出るその人の哲学、その人の癖、その人の命の歩を知り活かす発想で、顔晴れ（がんばれ）る顔を創る生き方指南、湿気（しけ）た顔を形状記憶させない生き方指南、ともいえます。

心の揺れがあるとき。心に余裕がないとき。自分が主ではなく我が出せないとき。そして吉凶の揺れ。

三十代・四十代は想定外の突発事故が、思わぬところから生まれることもある時期です。でも想定外の突発事故から思う生活の中の「腑に落ちること」は、科学がすべてとはいえない場面や場合があります。

「観相学」は元々人の役に立つために考案されたものです。役に立つとは「人の未来を明るくするもの」という意味です。それが顔の取り扱い説明書であるこの本・指南書の役目です。

「本当になりたい顔」「貴女のこれからの未来を明るく照らすために必要な顔」とは、いくつになっても「自分が表現できる顔」を手にすることはありませんか。顔を知り、自分・人を知り、その上で明るい偶然を意識して取り込むことは、さらなる明るい貴女の生活への変化に、つながることとなるではありませんか。

顔は人に向けての看板でもあるけれど、自分に向けての看板でもあります。心の理解の第一歩は顔からで、顔から心の理解は深まります。「顔のことを知る」とは、貴女の「縁・縁・運」すべてにつながるスタートとなります。いつの世も認識・啓発・予防は顔からスタートしてきました。顔の力を甘く見ず、顔の持つ力を知りましょう。三十代・四十代に「なりたいたい・なりたくない」顔の差のヒントは、顔を知ることにあるではありませんか。

その結果、貴女の運気を上げる顔を創ることにつながるではありませんか。

初めに

私は京都の事務所での活動以外に、滋賀県のある市立病院・緩和ケア科で、たくさんの末期がんの方々と出会っています。

この本を書く話を頂いたとき、ここでお会いした八十年代のおばあさんとの話がすぐ頭に浮かびました。そのときの話を書きたいと初めに思いました。

なぜそう思ったのか。余命一か月もないとき、貴女はどんな話を人にするのでしょうか。「思い出」「気がかり」「心残り」、どんな話でしょう。

読んでいただいている貴女にまだこの発想はないだろうと思ったからこそ、ここに書きたいと思ったのです。そのときの話は、このおばあさんが若かったときの心残りである「懺悔」でした。

それは五十年以上前の友人の姿を私に投影し、「許してほしい」と手を握り懇願される姿でした。点滴を変えにくる病室の担当看護師は、そのおばあさんの懇願される姿を見て、病室で涙が止まらなくなりました。

おばあさんは泣きながら手を握り話し終え、そしてその後、明るい顔で「ありがとう」と言いました。明るくても「有り難く」を連想させる顔だと、私には観えました。本来あることがない、「当たり前ではない」ことに対して礼をされた姿でした。

余命一か月もないときに、自然に顔が「明るく晴れやか」になりました。

頑張れないけれど晴れやかな顔になると、自然と頑張れる勇気がわくものです。

通常、不安や恐れは絶望につながりやすい。

光がない方に、見えない方に、否定している方に、思いは向きません。

そのことは、私たち世代にも普段の生活である話です。

確証や保証ではないけれど、穏やかであることを信頼したい。

心の平安が人生の目的であるということを、こんなときだからこそ見せていただけました。

結局は心の平安を求めていると。人の「我」の土台にはそのことがあると。

人はいつも何かを選択します。選んだものの結果で私たちはできています。そしてそれは顔に描かれています。

顔は合わせ鏡で伝染します。だからこそ「湿気た顔はしていられない」のです。

なぜならば、貴女の幸福実現に「湿気た顔」は邪魔な顔だからです。

「この顔でいくぞ」と朝「顔晴れ（がんばれ）の顔」から一日のスタートをすると、心の平安が宿る顔からのスタートとなります。未来に押しつぶされない顔、情熱と創造性を発揮できる機会に広がる顔となるのです。

「顔晴れの顔」は貴女から発信する言葉より声が大きい。伝わりが大きい。

だからこそ、幸福の実現を求める人こそ、昔から鏡に映る顔に命を注ぐのです。

命を注ぐとは「この顔でいくぞ」と朝の始まりに鏡に向かい、顔に毎日命を注いできた顔ということです。

今、この本を読んでくださっている貴女の年齢はいくつでしょうか。このおばあさんは八十年代でした。八十歳振り返ったとき、自分で自分を承認できているといいですね。

「禄とは縁・縁とは運」、この発想を持ち、これから進むことは、貴女の未来に「きつかけ」をもたらすに大事なこととなります。そして大事がわかることで恵みも増えることとなります。そう断言できます。